

トピック 戦争体験をどう受け継ぎ、次の世代に伝えていくか①

「前橋に平和資料館設立をめざす会」の浅尾剛事務局長に聞きました

(聞き手: 運営委員・内藤真治)

――「前橋に平和資料館を」の運動もようやく具体的な動きになってきたと伺っていますが……

多額の資金を要する資料館の開設には市民運動だけでは不十分と考え、私たちはこれまで市長への請願や申し入れを重ねてきました。

一昨年 11 月、山本龍市長は記者会見で「前橋空襲と終戦 75 周年を迎えるにあたり、市として空襲を語り継ぎ、平和資料を収集展示するための検討会をスタートさせたい」と語りました。市長の発言を受けて「検討会」は前橋学センター長の手島仁氏を座長に 22 名の委員で構成され、「めざす会」からは会長の岩根承成先生と事務局長の私（浅尾）が入りました。

これまで 9 回の会議と 2 度の視察を重ね、今年 3 月に A4 判 230 ページを超える市への「提言書」をまとめたところです。

――「提言書」の中で資料館設立の「形」は見えてきたのでしょうか？

新しく資料館の建物を建設する A 案から、博物館が建設されたり図書館がリニューアルされたりした場合にその中にコーナーを設ける B 案、廃校になった小中学校の校舎を転用する C 案、まちなかの空き店舗を転用する D 案その他いく

つもの選択肢を示して、あとは市当局に決定を委ねる形で検討会としての役割は終わりました。

各案について全国の先進事例を視察する計画も立てましたが多くはコロナ禍のため果たせず、わずかに熊谷市の場合（廃校になった市立女子高の校舎を転用）と市内の空き店舗（呑竜仲店）を転用する可能性について視察した 2 件にとどまりました。

――「めざす会」としての独自活動は？

2010 年 12 月、市内中心部にあった旧麻屋デパートが空襲の猛火に耐えて残り、利用されないままにあったのを市が所有者から買い取ると知り、「そこをぜひ平和資料館に」という運動からスタートしたのです。

昭和初年のデパート建築として貴重であり、耐震構造も問題がなく、国登録有形文化財だったのですが、当時の高木市長は建物の解体延期や私たちとの懇談の要望に応じず、市議会も請願を不採択としてしまいました。

写真は解体工事が始まった旧麻屋デパート（左）と 2010 年 12 月 23 日に「めざす会」が実施した解体直前の麻屋見学会の様子（約 40 名が参加）です。



――旧麻屋テパートの転用が不可能になったあとの活動は？

2011年から毎年総会、学習会を開くとともに、各地にある資料館の見学を始めました。

「埼玉県平和資料館」（東松山市）、「東京大空襲・戦災資料センター」（江東区北砂）、「長岡市長岡戦災資料館」（同日に柏崎刈羽原発も）を見学してきました。

前橋市内では民間の展示施設である「あたご歴史資料館」（住吉町 2020年に運営関係者高齢化のため閉館 収蔵品はすべて市に寄託）と「ぐんまマチダ戦争と平和資料館」（駒形町）を見学、懇談しています。

なお、両館の代表者、学芸員など2名ずつが「検討会」の委員になっていました。

――毎年夏に「戦争と平和のつどい」を開催していると同じました

私たちの目標は「戦争を学ぶことを通じて確固たる平和を」です。資料館ができるまではやるのがない、では済まされません。

そこで2014年から毎年8月の数日間、前橋市芸術文化れんが蔵（旧大竹酒造 三河町）を会場に企画行事「地域から戦争を考える」を開催しています。今年が8回目でした。

今年は満州での開拓団の体験を小池安好さん（95歳 大胡町）が話しました。

毎回市内各地域の9条の会の協力を得た展示

を行うとともに、戦争経験者の体験談、朗読、読み聞かせ、紙芝居などで子どもたちにも戦争の現実を知ってもらおうと努めています。

会長の岩根先生による記念講演が毎回欠かさず行われますが、堅い話ばかりでなくアトラクションとして楽器の演奏や歌も交え、楽しい集まりにしようと心がけています。

また、昨年の総会、学習会では渋川市の中沢守教育長（元校長）による「渋川市の平和教育実践について」と題する講演が行われましたが、上に立つ人の影響力の大きさを考えさせるもので、特に印象に残っています。

――「地域から戦争を考える」を続けてこられて、これは問題だなと感じている点があるでしょうか？

「めざす会」だけではなく年月の経過とともに仕方がないことではありますが、年とともに直接体験を語れる人が減っていくことですね。それだけに「戦後生まれがどれだけ間接体験から学んで次の世代に引き継いでいけるか」の問題があります。

悩みはなかなか若い人の参加が見られないことです。参加される方がお子さんやお孫さんを連れて来てくれるので、毎年何組かの小学生は姿を見せてくれるのですが、高校生や若い人の参加をどう増やしていけるかが今後の課題だと思っています。



今年の第8回企画行事「地域から戦争を考える」の様子です。

戦争体験を伝えること

戦後 76 年。日本において「戦争」が実感とともに身近なものとしての響きを持たなくなっています。戦争体験者の高齢化を止めることはできません。コロナウイルス感染拡大以前は、群馬県では多くの高校が修学旅行で沖縄に行っていました。沖縄では平和学習として学徒隊経験者の講演が必須でしたが、ここ数年は語り部の方々から直接お話をうかがうことが困難になっています。

また、地歴・公民科（日本史、世界史、現代社会、政治・経済）の授業において、第二次世界大戦について必ず学習します。生徒は小中学校でも学習しており、ほとんどの生徒が 8 月 6 日、9 日に何が起きたかも答えられます。知識として知っているし、平和であることが大切だと思っているのです。

しかし、戦争の悲惨さ、理不尽さを肌で感じ、平和は努力して獲得、維持していかなければならないと考え続けることは、生徒のみならず戦後生まれの教師でも難しいのかもしれない。

公民科を担当する私自身の毎年の重い課題です。幸い、私自身は戦争経験者の両親や祖父母から直接体験談を聞き、さらに戦争をテーマとする映画や本、講演を見聞きする機会を持つことができました。授業では、戦争の写真資料や映像を見せたり、体験記を読み聞かせたりと、できるだけ生徒がイメージしやすいような働きかけをしていますが、体験者ではない者がどこまで代弁者の役割を果たせるのかという逡巡があります。

県教育委員会からの「通知」

そんな中、県教育委員会から「被爆体験伝承者等派遣事業」の通知が届き、勤務校でこれを活用した人権教育を実施することになりました。この事業は、国立広島及び長崎原

爆死没者追悼平和祈念館で実施しているもので、被爆者本人や、被爆者の体験を語り継ぐ「被爆体験伝承者」、被爆者の体験記や詩を朗読する「被爆体験記朗読ボランティア」を全国の小・中・高等学校等に無料で派遣するものです。

詳細は国立広島及び長崎原爆死没者追悼平和祈念館のHP「被爆体験伝承者等派遣事業」をご覧ください。

<https://www.hiro-tsuitokinenkan.go.jp/project/successors/>
<https://www.peace-nagasaki.go.jp/densho-haken?torikumi>

前橋清陵高校の人権教育

以後は私が担当した、2018 年度の人権教育 LHR「被爆者体験伝承者による講演会」をふり返っての記録です。なお、勤務校の人権教育は、毎年テーマを変えて、講演会やパネルディスカッション、グループ討論などを行っています。2018 年度は戦争による人権侵害がテーマでしたが、同和問題、多文化共生、LGBTQ など様々なテーマを扱っています。

2018 年度人権教育 LHR の実施要項にはその目的として「人権侵害の最たるものは戦争であり、特に日本は、原爆投下による無差別殺人の被害を受けた歴史を持つ。しかし、被爆体験者は高齢になり、直接その体験を聞く機会はなくなりつつある。その中で若い世代が被爆体験伝承者となり、活動している。今回、長崎より被爆体験伝承者をお招きし、講演を聞くことにより、平和であることの大切さ、一人一人のかけがえのない命、人権について考える契機としたい」と記しました。

現われたのは若い女子学生！

被爆体験伝承者については、申し込みが通って派遣者名簿と派遣内容の連絡があり、派遣者は松野世菜さん、長崎純心大学 2 年生と

いうことだけわかっていました。松野さんとは事前に何度かメールのやり取りをしましたが、生徒とほとんど年の差のない若者が派遣されることに正直なところ、若干の不安がありました。

講演会当日は前橋駅まで迎えに行ったのですが、駅の南口から現れたのは、かわいらしい女子大生（ジェンダー平等の観点からは問題発言？）で、本当に大丈夫なのだろうかと心配になりました。

松野さんは何を語ったか

講演は約 60 分で、まず自分がなぜ被爆体験伝承者になろうと思ったかについて話したのち、被爆体験者の山脇佳朗さんについて、画像を交えて丁寧に説明されました。

被爆地長崎出身の松野さんは、小学生のころから当たり前のように平和学習に取り組んできたそうですが、中学生の時に長崎県外の方は原爆投下の認知度が低いことを知ってショックを受けたそうです。

その後、高校 3 年生の時に交流証言者活動に参加し、伝承者としてのトレーニングを積み、大学入学後伝承者としてデビューしたとのことでした。伝承者は松野さんのような若い世代だけでなく、定年退職された年代の方もいて、年齢は幅広いそうです。松野さんは伝承者としての活動はまだ日が浅いけれど、



平和祈念像近くの池と噴水。被爆直後に「水！水！」と求めながら亡くなった犠牲者に豊かで清らかな水を、と作られた。

幼いころから平和について考え続けているという点で、筋金入りの伝承者といえるかもしれません。講演の最後に生徒たちに対して、平和について自分の問題として考えてほしいと締めくくり、堂々たるものでした。

生徒たちの反応は？

講演後の質疑応答でも誠実に答えてくれて、とても良い時間を過ごせたと感じました。声高に力強くというより、内なる情熱を持ちながら淡々と、という印象の講演でしたが、かえってそれが生徒の心に響いたようです。生徒の感想文を読むと、自分たちと年のほとんど変わらない松野さんが被爆体験伝承者として活動していることに驚き、話しぶりに感動している様子がかがえました。

松野さんのような若い世代が、戦争体験の伝承を担っていることを頼もしく思うとともに、若い世代の伝承者の話に、同世代の若者が感動し、平和について考えるきっかけを持つことができることに希望を感じました。戦争体験を伝えることが困難になっていると嘆くばかりではなく、伝承者の育成が今後の鍵を握るのかもしれない。

また、国立広島及び長崎原爆死没者追悼平和祈念館の「被爆体験伝承者等派遣事業」が今後も継続するよう、学校や地域で大いに活用すべきだと思います。



爆心地近くにあって破壊された浦上天主堂の壁。爆心の標柱の傍に保存されている。